

人には、個々さまざまな癖や習慣がある。私の手帳は、ポケットサイズの小さなメモ用の手帳である。意識して、残して置いたのではないが、過去40年間の手帳が机の引き出しに行儀よく並んでいる。

20年前の何月何日、メモを頼りにして思い出すことができる。思い出してみると、反省させられることのほうが多い。楽しかったこと、苦しかったこと。懐かしさの中にも、一抹の寂しさを覚えることが多くなった。

老人保健施設には介護を必要とする方々が、「老化」という時の流れを押しとどめるためにリハビリを続けている。しかし、関節の動き、筋力は多少の改善はみられるが、記憶の衰えと「年齢」という大きな流れは、止めることはできない。

政局にも流れがある。最近の、国会の答弁には疑問が残る。「記憶にございません」。「記録はありません」。「書類は破棄しました」等々。国の将来を担う優秀な方々の、このような答弁である。認知症の合併とは思えない。

人それぞれに「物語」がある。出会いがある。大切にしないといけない。出会いの連続の中に、「運命」が潜んでいるような気がする。「運命」は、未来に開けるものではなく、追いかけてくるもののような気がする。

記憶を取り戻すために政治家にも、小さな手帳をお勧めしたい。待てよ。もしかすると、政治家には、忘れたいことが多すぎるのであろうか。黒い線で、塗りつぶしてまでも。「全く、記憶にございません」・・・と。